齒科外科

齒髓移植による異所性骨組織形成

Heterotopische Produktion von Knochen-
gewebe vermittels Transplantation von
Zahnpulpa. Von Prof. Dr. Silvio
Palazzi u. Doz. Dr. G. R. Bugliari
Z. f. Stomat., H. 13 1940.

硬組織の發生の問題は多年諸學者に依つて熱心に研究され、又研究されつゝある。而して此問題は既に各方面から解明されたが尙明かにせねばならぬものが残されてゐる。骨の發生過程の研究は實驗的に化骨を惹起せしむることに依つて大いに進んで居る。實驗方法としては種々の物質又は生活組織又は固定組織を移植することが行はれ、その他種々の方法が試みられてゐる。

移植材料として殆ど凡ゆる種類の組織、臓器が應用された。骨產生を得る爲めに數多くの移植法が行はれてゐるにも拘らず、獨特の硬組織から成る所の齒牙組織のみは等閑に附せられてゐた。

齒牙の中には、發育中の骨の中よりも著明に磷酸鹽生成酵素が存在し、多くの學者は之が硬組織の形成の際に特に重要であると云つてゐる。齒髓中には著明なる頻度に於いて Odonthelien(齒髓内の化骨の能力ある細胞群)が存在し、即ち健康人にては40%、或種の疾患に於いては58%も存在すると云はれ、著者等も之を證明したと云ふ。

依つて著者等は異所性骨產生の試験に齒髓組織を利用せんと考へ、2, 3實驗の結果、頗る興味ある成績を與へる所の一つの技術を發見した。著者等の實驗に於いて齒髓は著者等の目的に對し、非常に興味あるものであり、良好なる結果を示してゐる。レ線的に、移植後既に48時間後に通常海綿様骨に依つて明瞭に示される所の陰影が認められた。此の所見は6日後に明瞭となつた。11日後には陰影はその大きさを増し、更に陰影に濃淡の個所が現はれる様になつた。

組織學的に次のことが證明された。即ち移植の行はれた組織の内部に於いては隣接せる組織に反應を示さずに、正規の骨組織の可なりの量を認めた。

著者は本論文では發生せる組織の詳細に就いて述べることは次の發表に保留し、本論文では齒髓移植が短時日に異所性骨の特有なる形成を惹起したことを顯微鏡寫眞像を以て示すだけに止めると言つてゐる。

又此の成績は如何なる他の材料を使用しても得られなかつたものであると云ふ。

本論文に於いては残念乍ら如何なる組織中に移植したかは示されてゐない。(藤本抄)

保存療法科

齒槽膿漏症とダンロップ酸素噴霧療法

Periodontadisia and the Dunlop oxygen
treatment by Dr. Herbert T. Holdren
Salina, Kansas. Dental items of
intrest, No. 2, 1940,

著者は先づ齒槽膿漏症の臨牀症狀を正確に把握せしむる目的の爲に3種の定型的症狀を記載してゐる。即ち

急性症狀 之は毒性型(virulent type)とみるべきで著しく局部の徵候から診斷が出来る。早期には軟組織はべとべとした感じを與へ腫れて代赭色を示す。亦刺激に對し鋭敏で疼痛を訴へすぐ出血する充血状態である。輸出管及腺の感染の爲分泌液の量は甚しく増加し酸性反應を呈する。密度は粘稠で齒頸部の周りに粘りつく。更に骨質に迄病變が及ぶと咬合に際しても疼痛を訴へ嚥て齒牙の挺出をみる。高度の盲囊形成は骨質内に及び齒根の表面に細かい粒狀の齒石がみられる。時にはその大きさが増大して盲囊の大部を占める迄續くことがある。此の除去は必ず行ふべきものでこの型の疾患に最も怖い障礙を残す。

慢性症狀 之は非毒性型(non-virulent type)ともみるべきもので判然たる症狀を示さぬため診斷を誤ることがある。軟組織が下の骨の破壊より起る收縮で陷凹を示す位がその特徴ともみるべきで急性症狀の場合の如き出血は容易に起らない。骨質内には特に側方に擴がる傾向の少ない盲囊の存在が見られるが齒根膜は之には大して關與せず亦石灰の沈著にも關係は少ないように思はれる。膿汁も壓迫されたときのみに出る。之は毒性型のものには缺除するのが通常で